

# 保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートの可能性

柏 まり<sup>1)</sup>・佐藤 和 順<sup>2)</sup>

## Possibility of Childcare Support in Childcare facilities

This study aims to grasp associations between status quos of parents raising preschool children and support them according to childcare support. We mention childcare support possibilities as an attempt to aid families, positioning fathers and mothers as those responsible for childrearing. We think it necessary to give support to fathers and mothers of each family to be able to help them overcome troubles in childcare and enjoy time with their children. Based on the current association between the anxiety of parents of preschoolers and childcare support, in order to relieve parents from their anxiety, it is necessary for spouses to give mental supports. At the same time, we create a space where parents and children of similar ages can communicate.

### 1. 問題の所在

子育て支援は、子どもが健やかに育つことのできる社会の実現を目指している。子育ての主体者は、子どもの養育者（以下、親）である。子育て支援は、親が安心して子どもを産み育てることを支える社会的支援である。柏女（2003）は、子育て支援について「親及び家庭における児童養育の機能に対し、家庭以外の私的、公的、社会的機能が支援的に関わること」<sup>1)</sup>と定義している。また、大豆生田ら（2014）は、子育ては「社会の支えがあってはじめて親や家族が子育ての第一義的責任を果たせる」<sup>2)</sup>と述べている。また、原田（2002）は、子育て支援の目的として、心身ともに健康な子どもを育てることと、子育てしやすい社会をつくることを挙げている<sup>3)</sup>。すなわち子育て支援は、親、子どもの育ち、子育て社会、を総合的に支援する取り組みである。

育児ソーシャル・サポートは、育児支援に特化した社会的支援としての役割機能を有してい

る。育児ソーシャル・サポートは、母親の育児不安や育児ストレスの緩和要因として着目されている。柏木・若松（1994）は、「父親の育児・家事参加度の高さは母親の否定的感情の軽減につながる」<sup>4)</sup>と述べている。手島・原口（2003）は、母親の育児不安や育児ストレスの緩和要因として、育児ソーシャル・サポートの効果について言及している<sup>5)</sup>。渡邊・石井（2010）は、母親の育児ストレスは、父親や身近な人から支援を受け、育児への積極性が高まることで軽減されることを明らかにしている<sup>6)</sup>。このように、母親を子育ての主体者と位置づけた研究では、母親の否定的育児感情の緩和要因として、父親や祖父母からのサポートの有効性が確認されている。

しかし、母親を取り巻く限られた環境から得られる支援には、限界がある。特に、子育て家庭を取り巻く社会は厳しく、家庭の養育力の低下が懸念されている。転勤や住環境の為、祖父母と同居・近居ができない家庭も増え、心を許せる近親者や親しい友人からの育児支援が得にくい家庭もある。未就学の子どもを育てる家庭支援として、夫や祖父母からの育児支援を補完する子育て支援が必要である。荒木ら（2001）は母親のストレ

1) 岡山県立大学

2) 岡山県立大学

スを軽減する役割として、父親や身近な近親者に代わる保育者からの育児ソーシャル・サポートの可能性について触れている<sup>7)</sup>。

保育施設は、在園している子どもの健全な成長発達を支える場であると共に、在園児の親の子育てに寄り添う親育ての場でもある。また、保育施設には、近隣の子どもと親が安心安全に過ごせる場でもあることから、地域の子育て支援拠点としての機能も有している。地域との関わりが希薄化する今日、保育施設の専門知識と技術や地域との繋がりは、子どもの育ちにふさわしい子育て社会の実現に有用と考える。

保育施設が支援拠点となり安定的に支援を提供することが、子育て家庭の養育力を高め、子育ての健全化を推進するものでもある。保育施設を拠点として子育て家庭と地域が繋がることが、子どもが健やかに育ち・安心して育てられる地域コミュニティづくりの一助となるのではないだろうか。

## II. 研究の目的

本研究の目的は、子育て家庭が求める支援ニーズに応じた子育て支援を行うために、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートの可能性について検討することである。第一に、全国の未就学の子どもを持つ親を対象とした質問紙調査を実施し、子育て家庭の実情を把握する。第二に、親の子育てに関する意識と親の育児ソーシャル・サポートに関する意識との関連性から、子育て家庭が求める育児ソーシャル・サポートを把握する。研究を通して、子育て家庭における子育て機能を補完する保育施設の役割について考察し、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートの可能性について検討する。

## III. 研究の方法

### 1. 調査概要

本研究は、無記名自記入による質問紙調査を実施した。調査方法は、研究対象者にアンケート案

内メールを配信し、URLアクセス法<sup>8)</sup>により回答を求めた。調査期間は、2015年9月にアンケートを配信し、10月上旬を回収期限とした。

倫理的配慮として、アンケートでは氏名、住所等個人情報の収集を行わず統計的手法によりデータ集計を行い、個人等が特定されることがないようにした。アンケート案内メールに記載されたURLアクセス法を採用し、回答は自由意思(任意)とした。本調査については、平成27年度岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した。

### 2. 調査項目と相関分析

本研究の調査項目と分析尺度は、以下のとおりである。

- (1) 回答者の属性について
- (2) 親の育児不安を探る「育児不安尺度」
- (3) 親の育児感情を探る「育児感情尺度」
- (4) 親の育児ソーシャル・サポートに関する意識を探る「育児ソーシャル・サポート尺度」

上記の調査項目から得られた回答者の属性を概観し、子育て家庭の実情について把握する。また、親の子育て不安や否定的育児感情を緩和し、育児への積極性を高めるために必要となる育児ソーシャル・サポートについて明らかにする。本研究で行う相関分析項目は、次のとおりである。

- ①「育児不安尺度」と「育児ソーシャル・サポート尺度」との相関分析
- ②「育児感情尺度」と「育児ソーシャル・サポート尺度」との相関分析

上記に示した相関分析から得られた関係性の諸相から、子育て家庭に必要な育児ソーシャル・サポートを模索する。

### 3. 尺度概要

本研究で用いる尺度の概要は、下記の(1)～(3)のとおりである。

- (1) 親の育児不安を探る「育児不安尺度」  
親の育児不安を探る尺度として、手島・原口

表1：育児不安尺度項目の概要

尺度	下位尺度	概要	本調査で用いた質問項目
親の育児不安要因を探る「育児不安尺度」	中核的育児不安	子どもや育児に対する感情に関する項目	1. 育児についていろいろな心配なことがある 2. 親としての能力に自信がない* 3. 子どもの発育・発達が気にかかる 4. 何となく育児に自信が持てない 5. 子育てに失敗するのではないかと思うことがある 6. この先どう育てたらいいのかわからない 7. よその子どもと比べて、落ち込んだり、自信をなくしたりすることがある 8. どうしついたらよいか分からない
	育児感情（否定）	子育てに対する不安に関する項目	9. 子どもを虐待しているのではないかと思うことがある 10. 子どもと一緒にいるとき、心がなごむ 11. 子どもといっしょにいると楽しい 12. 子どもを育てることが負担に感じる 13. 子どもをわずらわしいと思うことがある 14. 子どもを生まなければ（持たなければ）よかったと思う 15. 育児意欲がない 16. 子どもを憎らしいと思うことがある
	育児時間	時間に関する項目	17. 自分の時間がない 18. 1人になれる時間がない 19. 自分のペースが乱れる 20. 子どものために仕事や趣味を制約される 21. 毎日同じことの繰り返しをしている 22. 家事をする時間がない

※下線部については、男性回答者に対応できるよう一部修正した

(2003)<sup>8</sup>が開発した「育児不安尺度」を用いる。「育児不安尺度」の下位因子は、第1因子「中核的育児不安」、第2因子「育児感情（否定）」、第3因子「育児時間」によって構成されている。下位因子について $\alpha$ 係数を算出した結果、いずれも高い信頼性が認められている。親の育児不安の測定に用いる因子項目の概要と $\alpha$ 係数は、次のとおりである。

①中核的育児不安：

育児に対する不安に関する項目 ( $\alpha=.875$ )

②育児感情（否定）：

育児に対する感情に関する項目 ( $\alpha=.805$ )

③育児時間：

育児に係る時間に関する項目 ( $\alpha=.812$ )

本研究では、信頼性が認められる親の育児不安要因の22項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までを程度に従い4件法を用いて評定する。具体的な質問項目については、表1に示したとおりである。

(2) 親の育児感情を探る「育児感情尺度」

親の育児感情を探る尺度として、荒牧 (2008)<sup>9</sup>が開発した「育児感情尺度」を用いる。「育児感情尺度」は、第一因子「育児への負担感」、第二因子「育児への不安感」、第三因子「育児への肯定感」によって構成されている。下位因子尺度の $\alpha$ 係数を算出した結果、いずれもおおむね十分に高く、信頼性が確認されている。親の育児感情の測定に用いる因子項目の概要と $\alpha$ 係数は、次のとおりである。

①育児への負担感：

育児への束縛による負担感の項目 ( $\alpha=.720$ )

子どもへの態度・行為への負担感の項目 ( $\alpha=.750$ )

②育児への不安感：

育て方への不安感 ( $\alpha=.810$ )

育ちへの不安感の項目 ( $\alpha=.830$ )

③育児への肯定感：

育児への肯定感の項目 ( $\alpha=.720$ )

本研究では、信頼性が認められる親の育児感情

表2：育児感情尺度項目の概要

尺度	下位尺度	概要	本調査で用いた質問項目
親の育児感情を探る「育児感情尺度」	育児への負担感	育児への束縛による負担感	1. 毎日、育児の繰り返しばかりで、社会とのきずなが切れてしまうように感じる 2. 自分一人で子育てしているような気がする 3. 子どもに時間を取られて、自分のやりたいことができず、イライラする 4. 子どもを育てるために我慢ばかりしている
		子どもの態度・行為への負担感	5. 子どもが汚したり散らかしたりするのでイヤになる 6. 自分の子どもでもかわいくないと感じることがある 7. 子どもが自分の言うことを聞かないのでイライラする 8. 子どもがわずらわしくてイライラする 9. 子どものことを考えるのが面倒になる
	育児への不安感	育て方への不安感	10. 育児のことでどうしたらよいかわからなくなる 11. 子どもをうまく育てていけるか不安になる 12. 自分の育て方でよいのかどうか不安になる 13. 子どもにうまく対応できていないと感じることがある
		育ちへの不安感	14. 入園後、自分の子どもが他の子どもに遅れないでついていけるか不安になる 15. 他の子どもにはできて、自分の子どもにはできないことが多い 16. 同年齢の子どもと比べて、自分の子どもは幼いと感じる 17. 他の子どもと比べて、自分の子どもの発達が遅れているのではないかと思う
	育児への肯定感	肯定感	18. 子どもを育てるのは楽しいと思う 19. 子どもを育てることは、有意義で素晴らしいことだと思う 20. 子どもの成長が楽しみだと感じる 21. 子どもを育てることによって、自分も成長しているのだと感じる

の21項目について、「よくある」から「まったくない」までを程度に従い4件法を用いて評定する。具体的な質問項目は、表2に示したとおりである。

(3) 親の育児ソーシャル・サポートに関する意識を探る「育児ソーシャル・サポート尺度」

親の育児ソーシャル・サポートに関する意識を探る尺度として、手島・原口(2003)<sup>10</sup>、原口・手島(2006)<sup>11</sup>が開発した「育児ソーシャル・サポート尺度」を用いる。「育児ソーシャル・サポート尺度」は、第一因子「精神的サポート」、第二因子「育児ヘルプ」、第三因子「居場所の欠如」、によって構成されている。下位因子についてα係数を算出した結果、いずれも高い信頼性が認められている。親の子育て環境の測定に用いる因子項目の概要とα係数は、次のとおりである。

①精神的サポート：

養育者のサポートの源となり、夫婦で子どもの様子について話し合える関係や心配事を相談できる関係があること等、自分の育児における精神安

定に関する項目(α=.831)

②育児ヘルプ：

専門家によるサポートとして育児相談できる場や育児に関する情報提供に関する項目等、育児代替の共助的サポートに関する項目(α=.829)

③居場所の欠如：

子どもが安心して遊ぶことのできる場所や親が安心して子育てについて話し合える人や場所があること等、家庭以外の居場所の欠如に関する項目(α=.747)

ただし、本研究では、子育て家庭における身近な社会的支援拠点として保育施設における育児ソーシャル・サポートの可能性について検討することを目的としていることから、保育施設及び保育者に関する項目を追加して調査を試みた。追加項目については、先行研究を手がかりとして、共同研究者1名、子育て支援拠点スタッフ3名からの助言を得て、筆者が共同研究者1名と共に選定した。本調査では、因子ごとにα係数を算出し信頼性が確認された7つの質問項目を質問紙に採用

表3：育児ソーシャル・サポート尺度の項目概要

尺度	下位尺度	概要	本調査で用いた質問項目
親の育児不安の緩和要因を探る「育児ソーシャル・サポート尺度」	精神的サポート	配偶者の育児における精神的安定に関する項目	1. その日の子どもの様子を夫婦で話し合うことができる 2. 子どもの心配事があるときに配偶者に相談できる* 3. 配偶者はあなたをよく理解してくれている* 4. 配偶者はあなたの代わりに育児や家事ができる* 5. 私一人で子どもを育てている
	育児ヘルプ	専門家による育児サポートや育児代替の共助的サポートに関する項目	6. 子どもの心配事があるときに相談できる人がいる 7. 子育てをする中で感じたことを安心して話すことができる人がいる 8. 歯医者や美容院などに行きたいとき、預かってくれる人がいる 9. 短時間でも預かってくれる人が近くにいる 10. 母乳育児や離乳食など、子育てについて話し合える人が身近にいる 11. 育児の仕方を相談できる人（医師・保健婦・保育士などの専門家）がいる 12. <u>子育てに困ったときには気軽に相談できる保育の専門家（保育者）が身近にいる</u> 13. <u>子どもの成長を気にかけてくれる保育の専門家（保育者）が身近にいる</u> 14. <u>子どもの心配事があるときにすぐ相談できる保育施設がある</u> 15. <u>子どもを安心して遊ばせられる保育施設が身近にある</u> 16. <u>子どもと歩いて遊びに行ける保育施設が身近にある</u> 17. <u>子育てについて専門的な知識を得る機会がある</u> 18. <u>短時間でも預かってくれる保育施設が身近にある</u>
	居場所の欠如	家庭以外での居場所づくりに関する項目	19. 同じ年くらいの子どものと遊ばせる機会がない 20. 同じ年くらいの子どものをもつ親と話す機会がない* 21. 子育てのことを継続的に話せる機会がない 22. 同世代の子どもの持つ家族との付き合いがない 23. 子どもを預けたり預かったりする子育ての仲間が身近にいる 24. 移動の手段が乏しく車がないと外出しにくい

※下線部については、男性回答者に対応できるよう一部修正した  
※二重下線部は本調査で新たに追加した質問項目である

した。

親の子育て環境として想定される24項目について、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までを程度に従い、4件法を用いて評定する。具体的な質問項目については、表3に示したとおりである。

#### 4. 分析方法

分析方法は、第一に、回答の性別、年齢、世帯構成、子どもの数に加えて、就労状況等について単純集計を行い回答者の属性について概観する。第二に、先行研究に基づき親の子育て感情を把握する測定する2つの尺度（①育児不安尺度、②育児感情尺度）と、親の育児ソーシャル・サポートに関する意識を測定する育児ソーシャル・サポート尺度を用いて相関分析を行い、子育て家庭に内在する育児ソーシャル・サポートの課題を顕在化

する。その際、相関係数.200を基準とし、それを上回る値の場合に相関があるとみなすことにする。

#### IV. 結果と考察

##### 1. 回答者の属性からみた子育て家庭の実情について

回答数は、1,133名であり、回答者全員が未就学児を有している子育て中の親である。調査対象の親の性別、年齢、世帯構成、子どもの数に関する結果の詳細は、表4～7のとおりである。

具体的には、性別に大きな偏りはなかった。年齢では、10代と60代以上の回答者がやや少ないが、全ての年齢層から回答を得ることができた。世帯構成では、「夫婦と子ども」が83.4%と最も高く、核家族世帯が一般化した子育て家庭の実情が認められた。また、子どもの数では、「1人」が46.7%、次いで「2人」が40.2%となり、少子

家庭の実情が把握された。本研究の回答者は、年齢、性別に加え世帯構成等も偏りなく、わが国の状況を反映しており、未就学の乳幼児を持つ子育て家庭の実情を把握し、課題について顕在化することが可能である。

親の就労状況について「就労形態」と「職場からの帰宅時間」から子育て家庭の実情を把握した。結果の詳細は、図1～2のとおりである。

男女別にみた親の就労形態では、「正社員（全項目を含む）」は、男性89.1%、女性20.7%、「専業主婦（夫）」は、男性0.3%、女性55.4%であった。男性の89.1%を占める「正社員」の内訳は、「恒常的に残業あり」44.2%、「定時帰宅」36.5%、「勤務時間が不規則」5.8%、「フレックスタイムや短時間就業」2.4%、「在宅勤務」0.2%となった。

男女別にみた職場からの帰宅時間は、「17時前」が男性2.2%、女性13.9%、「17時～20時まで」が男性53.4%、女性23.4%、「20時～22時まで」が男性27.0%、女性0.9%、「22時以降」が男性6.5%、女性0.5%、「不規則」が男性7.0%、女性2.6%、「自宅にいる」が男性2.9%、女性58.1%、「その他」が男性1.0%、女性0.5%と続いた。

特に、男性の就労の実情として恒常的な残業や20時以降に帰宅する厳しい職務実態の一部を把握することができた。また、女性は有職者であっても20時までには帰宅しており、家庭と仕事を両立する女性の姿が明らかとなった。

表4：性別 (単位は%)

男性	女性
51.7	48.3

表5：年齢 (単位は%)

10代	20～24歳	25～29歳
0.2	2.1	24.4
30～34歳	35～39歳	40～44歳
10.8	16.2	25.1
45～49歳	50～59歳	60代以上
7.0	13.5	0.9

表6：世帯構成 (単位は%)

夫婦と子ども	ひとり親と子ども	子どもと親とその親 (実父母・義父母)	その他
83.4	3.3	12.1	1.2

表7：子どもの数 (単位は%)

1人	2人	3人	4人	無回答
46.7	40.2	10.4	2.6	0.1

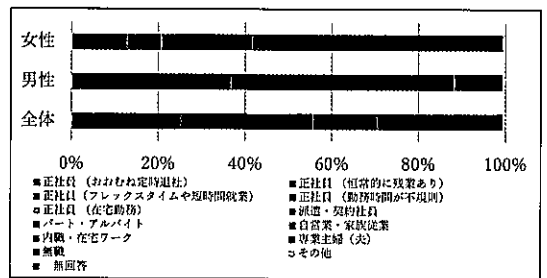


図1：就労状況(性別)

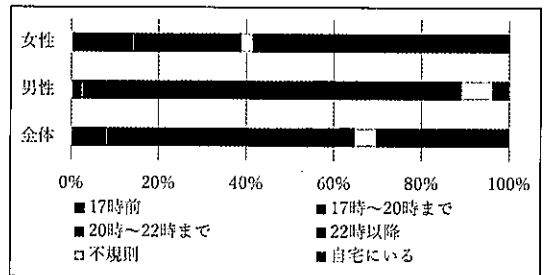


図2：帰宅時間(性別)

## 2. 親の子育て意識と育児ソーシャル・サポートとの関係性の検討

親の子育て感情に関する「育児不安尺度」, 「育児感情尺度」の2尺度と、親の子育て環境を測定する「育児ソーシャル・サポート尺度」との相関分析を行った。分析結果の詳細については、表8のとおりである。

## (1) 育児不安

「育児不安尺度」と「育児ソーシャル・サポート尺度」との相関分析を行った。分析の結果、育児不安尺度の下位因子「中核的育児不安 (-.205\*\*)」と育児ソーシャル・サポート尺度の下位因子「精神的サポート」には、負の相関がみられた。育児不安尺度の3つの下位因子と育児ソーシャル・サポート尺度の下位因子「育児ヘルプ」には、相関がみられなかった。育児不安尺度の下位因子「中核的育児不安 (.325\*\*)」, 「育児感情 (.260\*\*)」, 「育児時間 (.317\*\*)」, の3因子と育児ソーシャル・サポート尺度の下位因子「居場所の欠如」には、正の相関がみられた。

男女別にみた相関分析結果の詳細は、次のとおりである。

### ①「育児不安尺度」×「精神的サポート」

男性には「育児不安尺度」の3因子において、育児ソーシャル・サポート尺度の下位因子「精神的サポート」との相関は認められなかった。女性では、「中核的育児不安」因子と「精神的サポート」因子に負の相関 (-.271\*\*) が認められた。具体的には、女性は精神的サポートに関連した配偶者からの支援が得られていると感じるほど育児不安が軽減する結果となった。つまり、女性の育児不安を緩和するためには、配偶者が女性の言葉や思いに耳を傾け、共に育児や家事を担えることが、結果として精神的な支えとなり、育児不安の緩和に繋がっていると考えられる。

### ②「育児不安尺度」×「育児ヘルプ」

男性には「育児感情 (否定)」因子と「育児ヘルプ」因子に正の相関 (.276\*\*) が認められたが、女性では「育児不安尺度」の3因子において相関が認められなかった。具体的には、育児の専門家や育児代替による育児ヘルプは、男性の否定的な育児感情を高めることが把握された。ここから、慣れない場所や他者、関係性が希薄な専門家からの育児ヘルプは、男性の育児に対する不安感や負担感を高め、結果的に育児意欲を低減させる恐れがあることが推察される。

### ③「育児不安」×「居場所の欠如」

性別に関係なく「中核的育児不安」因子 (男性: .376\*\*, 女性: .305\*\*), 「育児感情 (否定) 因子 (男性: .287\*\*, 女性: .222\*\*), 「育児時間」因子 (男性: .365\*\*, 女性: .313\*\*), 3因子は、「居場所の欠如」因子と正の相関が認められた。具体的には、居場所が十分に得られていないと感じる親ほど育児不安や否定的な育児感情も高くなった。また、「居場所の欠如」は「育児時間」に関する不安項目と関連していることから、安心して子どもと過ごせる場や子育て仲間との交流が、子育て中の親が子育てにゆとりを感じたり、家事時間の確保も有用な支援のひとつと考えられる。

## (2) 育児感情

「育児感情」と「育児ソーシャル・サポート」との相関分析を行った。分析の結果、育児感情項目の「育児への負担感 (-.238\*\*)」と育児ソーシャル・サポート項目の「精神的サポート」には負の相関があった。育児感情項目の「育児への負担感 (.252\*\*)」, 「育児への不安感 (.280\*\*)」と育児ソーシャル・サポート項目の「居場所の欠如」には、正の相関がみられた。育児感情項目の「育児への肯定感 (.420\*\*)」と育児ソーシャル・サポート項目の「精神的サポート」については、強い正の相関がみられた。

男女別にみた相関分析結果の詳細は、次のとおりである。

①精神的サポートは、女性の育児感情項目の「育児への負担感」と負の相関 (-.232\*\*) があった。男性は、育児感情項目「育児への肯定感」と強い正の相関 (.538\*\*) が認められた。女性の「育児への肯定感」においても正の相関 (.383\*\*) が認められた。

具体的には、配偶者からの支援は、性別に関係なく肯定的育児感情を高める効果があり、特に男性においてはその傾向が顕著に認められた。

②育児ヘルプは、女性の育児感情項目の「育児への肯定感」と正の相関 (.219\*\*) がみられた。男

性については、育児感情項目と育児ヘルプとの相関は認められなかった。

具体的には、保育の専門家によるサポートや短時間の託児に関するサポートが得られていると感じている女性ほど、育児肯定感が高いことが把握された。つまり、保育施設の利用経験や親しい友人の存在があると推測される母親には効果があるが、保育施設や地域との関係性が希薄になりやすい男性にとっては、逆効果となることがわかった。  
③居場所の欠如は、性別に関係なく育児感情項目

の「育児への負担感（男性：.343\*\*、女性：.234\*\*）」と、「育児への不安感（男性：.330\*\*、女性：.250\*\*）」と正の相関があった。また、女性は「育児への肯定感」と負の相関（-.238\*\*）があった。

具体的には、子育て中の親は、家庭以外で子どもや子育て仲間と交流する場を得ていると感じることで、子育てに関する否定的な感情を軽減できる可能性がある。また、居場所の欠如へのサポートは、女性の育児への肯定的感情を高めることが期待される。

表8：親の子育て意識と育児ソーシャル・サポートに関する相関

相関		全体			男性			女性			
		I精神的サポート	II育児ヘルプ	III居場所の欠如	I精神的サポート	II育児ヘルプ	III居場所の欠如	I精神的サポート	II育児ヘルプ	III居場所の欠如	
育児不安	I 中核的 育児不安	相関係数	-.205**	.014	.325**	-.100*	.169**	.376**	-.271**	-.171**	.305**
		有意確率 (両側)	.000	.638	.000	.016	.000	.000	.000	.000	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547
	II 育児感情 (否定)	相関係数	.095**	.155**	.260**	.148**	.276**	.287**	-.007	.028	.222**
		有意確率 (両側)	.001	.000	.000	.000	.000	.000	.862	.510	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547
	III 育児時間	相関係数	-.057	.022	.317**	.073	.126**	.365**	-.137**	-.117**	.313**
		有意確率 (両側)	.054	.462	.000	.077	.002	.000	.001	.006	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547
育児感情	I 育児への 負担感	相関係数	-.238**	.003	.252**	-.164**	.143**	.343**	-.232**	-.193**	.234**
		有意確率 (両側)	.000	.926	.000	.000	.001	.000	.000	.000	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547
	II 育児への 不安感	相関係数	-.147**	.031	.280**	-.132**	.100*	.330**	-.137**	-.061	.250**
		有意確率 (両側)	.000	.296	.000	.001	.015	.000	.001	.156	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547
	III 育児への 肯定感	相関係数	.420**	.193**	-.186**	.538**	.177**	-.124**	.338**	.219**	-.238**
		有意確率 (両側)	.000	.000	.000	.000	.000	.003	.000	.000	.000
		度数	1133	1133	1133	586	586	586	547	547	547

\*\*、相関係数は1%水準で有意(両側)

\*、相関係数は5%水準で有意(両側)



## V. 総合考察

1. 回答者の属性から把握された子育て家庭の実情  
回答者の子育て家庭の実情として、次の3点を把握することができた。

- (1) 核家族世帯が多く、3世代同居世帯は少ない
- (2) 子どもの数が少なく、少子家庭の傾向がある
- (3) 男性の中には、恒常的な残業や20時以降に帰宅する就労状況があり、女性との働き方に違いがある

本調査において、核家族世帯の一般化や少子家庭、男性の恒常的な残業に伴う女性への育児負担が偏る子育て家庭の実情は、わが国の子育て家庭に指摘される課題を反映する結果となった。特に共働き家庭においては仕事と家庭の両立が難しいことが推察できる。また、専業主婦家庭においても、男性の恒常的な残業や帰宅時間の遅延により女性への育児負担の偏りは顕著であった。そのため、子育て家庭が支援を必要とした時に、配偶者や祖父母に代わる社会的支援が不可欠であることがわかった。父親・母親の双方を子育て支援の対象として、身近な子育て支援の場として、子育て家庭の養育を補完する保育施設の役割が必要と考える。

### 2. 求められる育児ソーシャル・サポート内容

親の子育て意識と育児ソーシャル・サポートとの相関分析により把握された子育て家庭における社会的支援の実態は、次のとおりである。

- (1) 育児不安や育児感情に関する親の子育て感情は、身近な配偶者からの「精神的サポート」と関連がある。
- (2) 親の育児不安を緩和させる要因として、子どもと親が安心して集い、子ども同士が遊び、親同士が交流できる「居場所」をつくるのが有効である。
- (3) 男性の肯定的な育児感情は、育児サポートの前提となる夫婦間の関係性を基盤とする「精神的サポート」と強い相関がある。

- (4) 保育の専門家によるサポートや育児代替の共助的サポートである「育児ヘルプ」は女性の育児肯定感と相関があるのに対し、男性では否定的な育児感情と相関がある。

子育て家庭における育児ソーシャル・サポートの実情から、保育施設に求められる育児ソーシャル・サポートについて考察を加える。

第一に、子育て環境に関連する「精神的サポート」は、夫婦の関係性を基盤とした育児支援の核となる。しかし、男性の恒常的な残業や帰宅時間の遅さから、夫婦で子育てについて語り合い、いつでも相談できる関係づくりが困難な実情が明らかとなった。

保育施設における育児ソーシャル・サポートは、夫婦間の会話の大切さを伝え、子育てに関する共通理解の橋渡しとなる役割が重要となる。また、身近な理解者として親の思いを受け止める役割を担えるように、親との信頼関係づくりが不可欠である。また、「精神的サポート」は、男性の肯定的な育児感情と強い相関が認められた。少子化や父親の就労状況の実態から、子どもとのかかわりが不慣れで、日頃から子どもとのかかわる時間を取りにくい男性にとって、配偶者の理解やサポートが不可欠である。男性の育児参加を促進するためには、配偶者の理解や会話といった、よりよい夫婦関係づくりを支えることが公的支援の鍵となる。

第二に、保育の専門家や配偶者以外の他者からの「育児ヘルプ」は、保育施設や子育て仲間を持つと考えられる女性には部分的に効果があった。女性は、保育施設における専門的な公的支援や子育て仲間と共助的支援関係の中で子育てを楽しんでいると感じ、子育てを肯定的に捉えていることが明らかとなった。しかし、保育施設や地域との関係性の希薄な男性にとっては不安感情を高め、逆効果となることもわかった。保育の専門家や子育て仲間のサポートを得にくい男性の生活実態を鑑みると、保育施設の利用頻度や保育者との関係性構築が課題となる。

保育施設に求められる育児ソーシャル・サポー

トは、男性に限らず、支援者側の一方的な押し付けは効果が低いことを認識し、利用する親の思いやニーズに寄り添うことを重視しなければならない。保育施設は、親との信頼関係づくりを目指し、性別に関係なく参加しやすい雰囲気づくりや仕事を持つ親も継続的に参加できる活動内容を検討することが重要と考える。また、親が保育施設で生活する子どもたちの姿や保育者の働きかけに触れることで、子どもの成長過程や必要な働きかけを感じる機会にもなる。保育施設として親の支援ニーズに寄り添いながらも、子育て家庭が子どもの健やかな育ちにとってよりよい環境となるように、必要に応じた指導助言ができる関係作りが支援の鍵となる。

第三に、同年代の子ども同士と一緒に遊んだり、親同士が交流できる機会を持つ等、家庭以外での「居場所の欠如」は、性別に関わらず育児不安や否定的育児感情の軽減に有効な可能性が示された。子育て家庭の孤立を解消するためには、地域の中で同年代の子どもや親同士が集い交流できる居場所づくりが必要である。

保育施設は、地域に暮らす子どもと親が安心して集まる場を提供し、親子が共に参加できる活動を実施することができる。さらに、保育施設と地域の人材や専門施設と連携しながら、地域の子育て情報発信基地としての役割を担うことも可能である。保育施設が子育て家庭同士の交流の場となり、専門家の見守りのもとに他の親子のかかわりや子どもの姿に触れることで、子育ての楽しさや大切さを自覚化する機会となるのではないだろうか。また、子育て仲間との交流により、父親・母親が互いの気持ちを知る機会となり、子育て意識の変容が期待できると考える。

以上のことから、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートが目指す方向性は、子育て家庭が抱える支援ニーズを補完し、親と子どもが安心できる子育て環境づくりを支えていくことである。そのためには、子育て家庭の基盤である夫婦関係の大切さを再確認し、子育ての自助を高め

ることで家庭の養育力の向上と安定を図ることが不可欠である。そこから、子育て家庭を支える親族や親しい友人からの支援が得られる関係性をつくり、親が地域と繋がる力を育てることで子育て共助機能が促進するものとする。さらに、子どもが健やかに育ち、全ての親が子育てを楽しむことで地域との関わりも積極的になるのではないだろうか。こうした、子育て中の親が地域コミュニティの中で活躍できる社会の仕組みづくりにおいて、地域の子育て支援拠点である保育施設の果たす役割は大きいと考える。

今後は、実際に子育て支援プログラムに参加している父親・母親へのヒアリング調査を実施し、保育施設利用についての不安感やストレスの要因や求められる支援内容を探ることが必要と考える。また、今回用いた分析尺度の精度を高め、分析項目を精選することで回答者の負担を軽減することも必要と考える。さらなる研究を重ねて、育児ソーシャル・サポートの可能性について探り、実践的な取り組みや支援効果について明らかにしていきたい。

## 註

註1) Web調査の妥当性については、大隅昇・前田忠彦「インターネット調査の抱える課題－実験調査から見えてきたこと－(その2)」『日本世論調査協会報』101, 2008, pp.79-94, 長崎貴裕「インターネット調査の歴史とその活用」『情報の科学と技術』58 (6), 2008, pp.295-300を参考にした。本研究においては、総調査誤差(カバレッジ誤差, 測定誤差, 標本誤差, 無回答誤差), データ加工処理誤差, 加重補正誤差などの体系的な評価が調査品質を左右するが, Web調査等の改善もこうした枠組みの中で考察すべきであり, これの延長線上に混合方式(mixed-mode)や統合化方式(unified mode)の議論がある。完璧な調査方式ではなく, よって種々の調査方式の特長を組合せた混合方

式で対応することから出発し、Web調査がこの枠組みの中で重要な位置を占め、様々な要請に応えられる可能性のある調査方式の1つであるという立場に立ち、調査等を実施した。

#### 引用・参考文献

- 1) 柏女霊峰『子育て支援と保育者の役割』フレール館, 2003, pp.28-29.
- 2) 大豆生田啓友・大田光洋・森上史朗編『やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズ よくわかる子育て支援・家庭支援論』ミネルヴァ書房, 2014, pp.4-5.
- 3) 原田正文『子育て支援とNPO』朱鷺書房, 2002.
- 4) 柏木恵子・若松素子『『親となる』ことによる人格発達生涯発達の視点から親を研究する試み』『発達心理学研究』第5巻, 第1号, 1994, pp.72-83.
- 5) 手島聖子・原口雅治「乳幼児健康診査を通じた育児支援—育児ストレス尺度の開発—」『福岡県立大学看護学部紀要』1, 2003, pp.15-27.
- 6) 渡辺弥生, 石井睦子「乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャル・サポートおよび自己効力感が及ぼす影響について」『法政大学文学部紀要』60, 2010, pp.133-145.
- 7) 荒木美幸・大石和代・岩木宏子・渡辺鈴子・池田早苗・達田志津子・小川由美「育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとの関連性」『長崎大学医療技術短期大学部紀要』14 (1), 2001, pp.89-95.
- 8) 手島聖子・原口雅治, 前掲論文, 2003.
- 9) 荒巻美佐子「育児感情尺度」堀洋道(監修), 松井豊, 宮本聡介(編)『心理測定尺度集VI 現実社会とかかわる<集団・組織・適応>』サイエンス社, 2008, pp.219-224.
- 10) 手島聖子・原口雅治, 前掲論文, 2003.
- 11) 原口雅治・手島聖「育児ソーシャル・サポートの構築」『久留米大学心理学研究』5, pp.21-28.

#### 付記

本研究はJSPS科研費26350058の助成を受けたものである。

